

香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成 12 年度

## 汲 仏 遺 跡 II

2001.3

香川県埋蔵文化財研究会

## 例　　言

1. 本書は、香川県警本部機動隊舎建設に伴い平成12年度に実施した汲仏遺跡（こんぼとけいせき）の埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は次のとおりである。

### 総括

所長 小原克己（平成12年11月～平成13年3月）

所長 菅原良弘（平成12年4月～平成12年10月）

次長 川原裕章

### 総務

副主幹 六車正憲

副主幹 大西誠治

係長 新一郎

主任主事 高木康晴

### 調査

主任文化財専門員 藤好史郎

文化財専門員 西村尋文

文化財専門員 蔵本晋司

文化財専門員 増井泰弘

調査技術員 豊岡多恵

4. 調査に際しては次の機関にご協力を頂いた。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
建設省中国地方建設局、香川県警察本部、地元各自治体、地元各水利組合

5. 報告書作成にあたって、下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。（順不同、敬称略）

柴田昌児（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター） 森岡秀人（芦屋市教育委員会）  
山田隆一（大阪府教育委員会） 渡邊恵里子（岡山県古代吉備文化財センター）

6. 本書で使用した略号は次のとおりである。

S A ; 棚列 S B ; 掘立柱建物 S D ; 溝状遺構 S K ; 土坑 S P ; ピット

S Z ; 耕作痕跡

7. 本書で用いている方位の北は国土座標系第IV系の北であり、標高は T.P. を基準としている。
8. 掘図の一部に、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。
9. 本書の挿図の作成・浄書、執筆・編集は藏本が行い、長井真由美・松本恭子が補助した。
10. 本書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。
11. 土器観察表中の法量について、焼成時等に生じた歪みなどのため、復元される口径等の確度が落ちるものについては（ ）を付して記載した。
12. 土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。
13. 土器観察表中の残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。

## 本文目次

|                 |    |
|-----------------|----|
| 1. 調査に至る経緯と経過   | 1  |
| 2. 調査の成果        | 1  |
| i. 立地と環境        | 1  |
| ii. 基本層序        | 8  |
| iii. 弥生時代の遺構・遺物 | 9  |
| iv. 古代の遺構・遺物    | 13 |
| v. 古代以降の遺構・遺物   | 13 |
| vi. まとめ         | 14 |

## 挿図目次

|                        |     |
|------------------------|-----|
| fig. 1 遺跡位置図           | 2   |
| fig. 2 遺構配置・調査区割図      | 3～4 |
| fig. 3 周辺遺跡分布図         | 5   |
| fig. 4 基本上層柱状図         | 8   |
| fig. 5 SD02断面図         | 9   |
| fig. 6 SD02出土遺物実測図1    | 10  |
| fig. 7 SD02出土遺物実測図2    | 11  |
| fig. 8 主要環濠の断面         | 14  |
| fig. 9 SD02出土土器胎土の出現頻度 | 16  |

## 表目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| Tab. 1 SD02出土土器観察表 | 18 |
|--------------------|----|

## 図版目次

|                 |   |
|-----------------|---|
| PL 1 SD02遺物出土状況 | 9 |
|-----------------|---|

## 1. 調査に至る経緯と経過

香川県警察本部は、機動隊舎を高松市多肥下町にある四国管区警察局用地へ移転することを決定した。これに伴い、香川県教育委員会文化行政課では事業所用地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認し、適切な保護処置を講じるため、平成9年9月に当該地の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生時代後期の遺物を多量に含む遺構などを確認し、事業予定地全域に遺跡が広がるものと判断された。試掘調査の結果を踏まえ、予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、香川県教育委員会は建設省中国地方建設局と協議を行い、事業の実施に先立って文化財保護法に基づく保護措置を講じる必要があり、工事施工の前に発掘調査を実施すること、遺跡名を汲仮遺跡とすること、調査については基本的には記録保存で対応することなどが決定された。

汲仮遺跡の調査は、平成10年度に第1次調査を行い、平成12年度に第2次調査を実施した。

第1次調査は、平成10年4月1日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、調査担当者をセンターとして平成10年10月1日より平成11年1月31までの期間で本館・車庫・配管部分について実施した。調査面積は、2,470m<sup>2</sup>である。調査区は、fig. 2に示すように車庫部分をI区、本館部分をII・III区として実施し、弥生時代前期の環濠集落、同後期の灌漑水路、平安時代の集落跡などが検出され、多大な成果を納めた。

第2次調査は、本館南側に潜水訓練槽及びレンジャー塔を建設することとなり、平成12年4月1日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、センターを調査担当者として平成12年6月1日より同年7月31までの期間で実施した。調査面積は、360m<sup>2</sup>である。

## 2. 調査の成果

### i 立地と環境

#### 地理的環境

四国島は、列島西南部に位置し、島北部の徳島県鳴門市ー池田町ー愛媛県新居浜市ー砥部町をとおる中央構造線によって、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯にわけられる。四国島北東部に位置する香川県は、その内帯東部地域に含まれる。内帯東部地域は、南縁に香川・徳島県境をなす標高700~1,000mの讃岐山脈（阿讃山地ともいう）が東西に長く横たわり、その北麓にへりつくように標高60~200mの丘陵地が展開し、丘陵部と瀬戸内海との間には東西に長く讃岐平野が広がる。

高松平野は、香川県中央部に位置する臨海性の沖積平野で、主に香東川起源の扇状地を中心とし、東部の春日川・新川流域には三角州帯・自然堤防帯といった氾濫原面が広く展開している。また、各河川の河口部には三角州からなる海岸平野が形成されており、現在の高松市街は、旧香東川河口の三角州帶上に立地している。平野周縁部は、西を標高483mの五色台山地、南を更新世後期から中期にかけて形成された数段の段丘面、東を標高272mの立石山を擁する雲附山地等<sup>(1)</sup>の丘陵・山地等が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。平野西限の五色台山地や平野内に点在する屋島や石清尾山といった独立丘陵は、地形学上メサと呼ばれ

る開析溶岩台地で、高松平野の基盤となる白亜紀後期の領家花崗岩類の上に、讃岐岩をはじめとする瀬戸内火山岩類の各種溶岩及び火山碎屑岩を載せる。平野南部に位置する標高120mの由良山は、火山碎屑岩等を伴わないことから基盤岩上に噴出した黒雲母安山岩からなる岩頭とされる。これら新生代の瀬戸内火山岩類は一般に讃岐層群と総称され、その火山活動は放射性年代や地質年代から中期中新世の短期間に集中しているとされる。旧石器時代から弥生時代にかけて、西日本を中心に多用された国分台や金山産のサヌカイトは、讃岐層群の最上位に溢流した溶岩中に产出する。

さて、香東川西岸の扇状地の形成時期は、形態や堆積物中の材の放射性炭素年代測定により、更新世末期のウルム氷期最盛期に比定されており（熊本ほか1986）、最近の調査によって中間東井坪や中森遺跡といった後期旧石器時代の遺跡が、表土層直下の浅い位置に点在することが明らかとなった。一方、香東川東岸の扇状地面では、木太本村II遺跡でT.P.-0.6m付近より蛤島丹沢火山灰層が、井手東I及び蛙股遺跡では、現地表下1mまでの比較的浅い位置で、鬼界アカホヤ火山灰層がそれぞれ検出されている。これらの点から、香東川以東の扇状地面では、沖積層の堆積が以西に比べてより厚く堆積したことが想定され、香東川を境にしてその東西で縄文前期以前の基盤層の形成過程に差があることが判明した。なお、現在石清尾山の西側を流れる香東川は、近世17世紀初頭に河川改修により現在の流路に固定されたもので、それ以前は石清尾山の東側を北東流する現御坊川が主流であったとされている。

遺跡は、東を春日川、西を御坊川（旧香東川）に挟まれた東西幅約5.7kmの平野中央部に立地し、現在の海岸線から約5.5km内陸部に位置する。現地表面の標高は、18.5m前後である。遺跡の立地する周辺地域は、かつて高橋により微地形分析が行われている（高橋1992）。それに従うと、遺跡周辺の平野部には、香東川の旧流路とされる2条の旧河道（旧河道A・B）が北東流し、その周辺には無数のバッチ状の埋没中州・埋没自然堤防が点在している。遺跡は、この旧河道A・B間の旧河道Bに東接する南北200m、東西150m程の紡錘形をした埋没中州・自然堤防のひとつに立地する。

#### 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、上記したように香東川東岸域平野中央部での確認例はない。多くは西岸域に集中し、僅かに平野東南縁の低位段丘上に立地する十川東・平田遺跡など、平野周縁の段丘上や丘陵斜面部に散在しているに過ぎない。平野中央部の大池から2点の有舌尖頭器が採集されているが、正式な調査によるものではないため、当該時期の遺跡が東岸平野中央部にまで分布を広げるのかは未だ不明である。

縄文前～後期の遺跡も、旧石器の出土と立地上オーバーラップする例が多い。また、当該期の西打（前・後期）、下司（前期）、佐料（後期）などの遺跡では、旧流路部や包含層からの遺物の出土例が大半であり、明確な遺構には未だ恵まれていない。



fig. 1 遺跡位置図

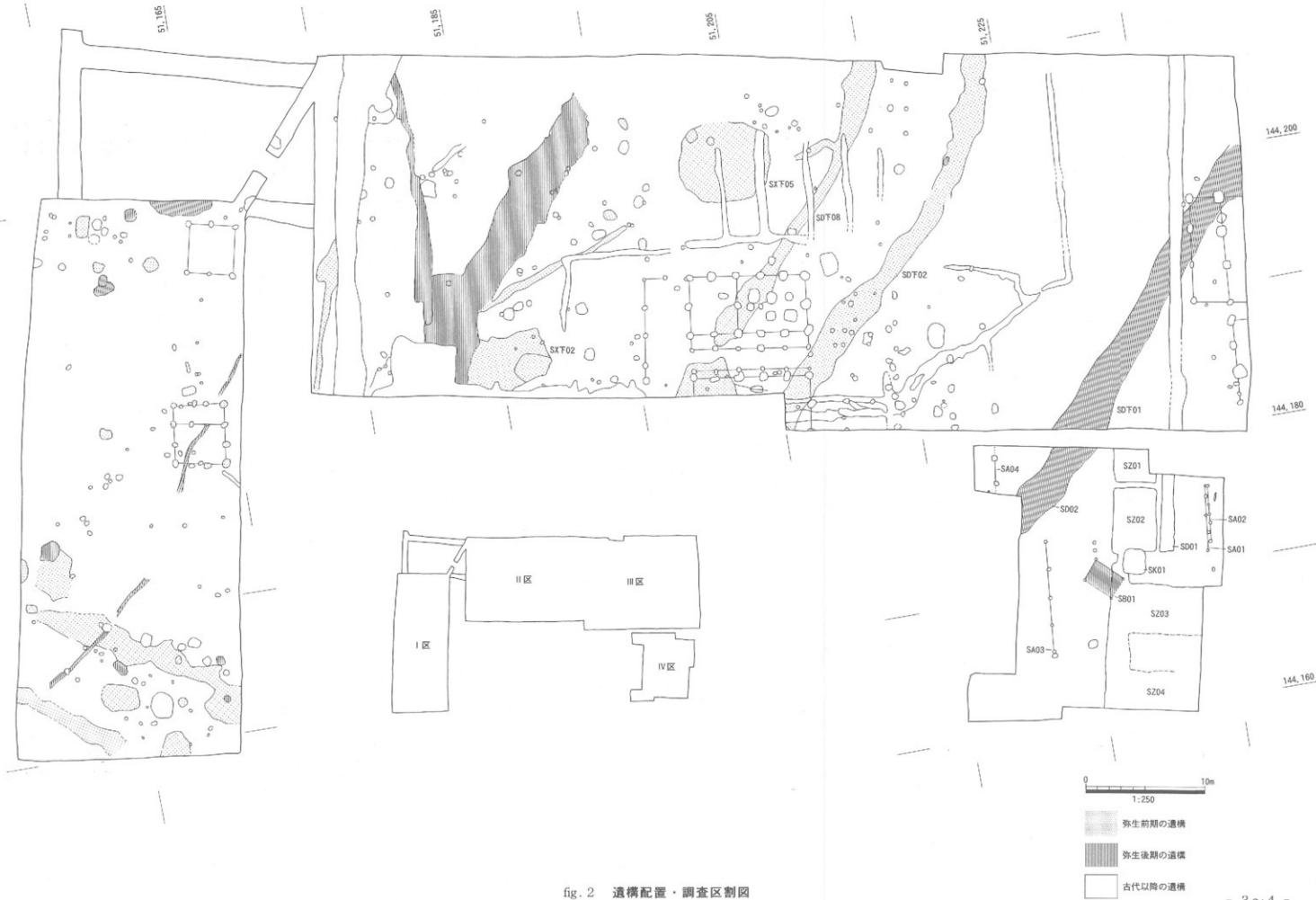


fig. 2 遺構配置・調査区割図

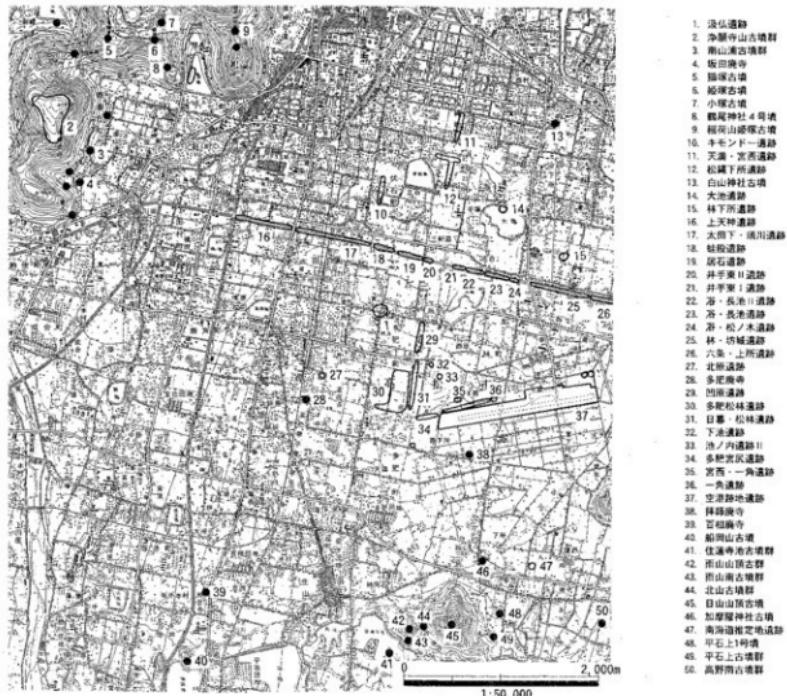


fig. 3 周辺遺跡分布図

縄文晩期になると、周縁部の丘陵根部で引き続き遺跡が営まれると共に、平野中央部への遺跡の進出が始まる。既に晩期前半には居石遺跡の旧流路より木製品を含む多量の遺物の出土がみられ、晩期後半、突帯文期には、林・坊城遺跡の旧流路より諸手鍬・えぶり・丸鍬といった木製農具類が出土している。いずれも埋没過程にあった旧流路部からの遺物の出土にとどまっており、今後集落域の検出が望まれる。なお、林・坊城遺跡の木製農具類が出土した土層からは、イネの花粉化石と共にヒエを含むイヌビエ属の頸と頸果も検出されており、雜穀栽培を伴った稻作が行われていた可能性が指摘される。一方で、同層出土の石器組成は後期以来の打製石斧類が半数程度を占め、大陸系磨製石器類は全く出土していない（森下 1996a）。こうした石器組成から伺える伝統的な獲得経済が主流を占めたであろう中で、どのようなプロセスで水稻農業という新しい生業サイクルが浸透していくのかが今後の課題となろう。また、晩期後半には井手東II遺跡において幅4mに及ぶ大型灌漑水路が開削されており、水稻栽培導入期に既に自然環境との共存から進めて管理への大きな一步を踏み出したとみられる点で評価されよう。

平野中央部への遺跡の進出は、引き続く弥生時代前期には加速する。前期前葉頃の遺跡の展開は低調ながら、中葉以降天満・宮西遺跡（前期中葉）、汲汲遺跡（前期後半前葉）で環濠集落が出現する。これら環濠で囲まれた範囲は、いずれも径70m前後<sup>(2)</sup>で、香川県内の他遺跡、鬼無藤井（約70m）、龍川五条（45×70m）、中ノ池（80×65m）、鶴部・川田（約60m）とほぼ同規模である点には注目しておきたい。当該時期の集落はむしろ環濠を有することが一般であり、集落の規模は、環濠で囲まれた範囲の広さではなく、環濠の条数や外環濠の有無によつ

て決定されている。こうした環濠がどのような目的で掘開されたのかは、必ずしも明らかにはなっていない。防御施設的性格を強調する意見もあるが、環濠内部で大型建物に付随したとみられる方形区画溝が中ノ池遺跡をはじめいくつかの遺跡で確認されていることを踏まえるなら、聖と俗を区切る境界（寺沢2000）との指摘も興味ある視点である。また、当該時期の生産遺構として、上西原、浴・長池、浴・松ノ木、浴・長池Ⅱの各遺跡でいずれも前期末頃の洪水砂によって埋没した不定形小区画水田や畦畔状遺構が検出されている。これら遺跡は、径1km程の範囲に納まる近接した遺跡群であり、平野部のどの程度までが耕地化され、水稻栽培が生業の一部として根付いていたかは、今後の調査の進展によるところが大きい。ただ、これら水田に給排水したとみられる幹線水路は、上天神遺跡1区 SD01、太田下・須川 SR02<sup>(1)</sup>などで検出されている。こうした幹線水路や環濠の開削は、集落内部や共同体間の協業が不可欠であり、上地や水利をめぐる他集団との軋轢やその調整には、強力なリーダーシップとカリスマ性を兼ね備えた首長の擁立が要請された。集団間の諸調整を契機とした共同体間の統合や重層化は首長の階級的成長を促し、ここに縄文時代の共同体首長とは異なる階級制に裏打ちされた政治的司率としての個人が誕生したのである。さらに、この頃には大陸系磨製石器類は一定程度の比率を占めるまでになっており、一方で打製石廬丁にみられるような石材選択に規制された地域色の創出も認められる。また、弥生時代を通して磨製石器類は、いずれも徳島県吉野川南岸産の片岩系統の石材が多用される傾向にある。石材の移動に代表される阿讚地域間の交流は、社会の基層をなす底流として縄文期以降維持され、後の古墳時代の集団関係を規定する要因のひとつとなる。

弥生中期には、平野部での遺跡の展開は多様化する。前期以来の環濠集落は、中期前葉には一斉に解体され、拠点化が阻まれる点が、中部瀬戸内海沿岸部に共通した大きな特徴だ。こうした弥生中期前葉頃における集落遺跡の衰退の要因については、河床面の低下による段丘崖の形成といった自然環境の変化に求める意見もある（高橋1996）。環濠集落の廃絶後、平野中央部には浴・長池（前葉）、浴・長池Ⅱ（中葉）、松並・中所（中葉から後葉）、多肥松林（中葉）、松林（中葉）、凹原（中葉）、日暮・松林（中葉）の各遺跡などで集落域が検出されているが、いずれも数棟の堅穴住居や掘立柱建物が確認されたのみで、拠点的な集落域の検出までは至っていない。また、中期前葉の集落数は極端に乏しいが、これが実体を反映したものかどうかはまだ調査の進展に待つ部分が大きい。

中期後葉には、比高約150m程の峰山山頂部に高地性集落の摺鉢谷遺跡が成立する。正式な調査を経ないまま消滅したため遺跡の内容は不明ながら、中期後葉を中心とした時期の土器や打製石廬丁をはじめとする石器類が採集されている。平野東縁部には、比高40m程の低丘陵上にほぼ時期的には重なる西浦谷や久米池南遺跡が知られているが、立地環境は大きく異なり同一視することはできない。前者は、やはりある種の緊張関係下に成立した特殊な集落形態とみるべきだろう。

弥生青銅器は、平野周辺部では北部の高松市石清尾山塊北端の下ノ山遺跡で広形銅矛1口が出土しており、南部の同市西植田町剣山下で細形？銅劍1口が、香川郡香川町安原下下倉で平形銅劍4口がそれぞれ知られている。また最近、空港跡地遺跡A地区の旧流路内より弥生前期の土器に伴って、銅劍もしくは銅矛の樋先端付近を転用した鑿と考えられる銅製品（吉田1999）が出土している。いずれも農業共同体間での農耕祭祀に使用されたのであろう。一方、多肥松林遺跡の旧流路内からは、中期中葉の土器と共に銅劍型木製品2点が出土しており、こうした木製模造品は個別集落内での祭祀に代用されたと考えられる。2点の木製品は、いずれも関部双孔が穿たれており、内1点は軸部断面が梢円形を呈するなど实物を忠実に模倣したものであ

ることは確かだ。材質の相違に関わらず、祭祀の在り方は共通していた可能性が想定されるが、儀礼終了後の扱い方には相当の差異が認められる。瀬戸内地域で中広形銅剣が振るわないことを考えるなら、2点の木製品は形態からも細形ないし中細形銅剣を模倣した可能性が高い。平野周辺部で中細形銅剣の出土例はみられないが、細形銅剣が上記剣山下のほか、木田郡牟礼町羽間西ノ谷で出土しており、多肥松林の弥生人はこれら青銅器を実際に見て模倣したことは間違いない。

後期から終末期の遺跡は、上天神（初頭）、太田下・須川（初頭）、汲仏（中葉）、林・坊城（中葉）、天溝・宮西（中葉から後半）、キモンドー（後半）、多肥松林（後半から終末期）、凹原（後半から終末期）、空港跡地（初頭・後半から終末期）、日暮・松林（後半から終末期）などの各遺跡で、堅穴住居や掘立柱建物から構成される集落域を検出している。後期後半段階での遺跡数の急激な増加傾向とそれに伴う平野部の開発の進展が指摘されて久しいが、集落遺跡の動向からはより冷静な判断が必要であろう。後半段階に成立した集落は、以後終末期まで継続するものが多い。一方、それ以前の集落は比較的短期間で廃絶するものが多く、そうした集落經營期間の差異が、性急な認識を助長させたのかも知れない。

さて、太田下・須川遺跡を加えた上天神遺跡群では、旧流路に区画された複数個の微高地が検出され、微高地上に5群の集落域が検出されている。その中央と東端の集落域周辺で、朱精製に関わる把手付広片口皿などの遺物が出土している。香川県内の朱関連遺物の初現は中期後葉に遡るが、後期に至って多用される傾向にある。上天神遺跡群では、50個体程度の中・大形鉢や80個体強の把手付広片口皿が出土しており、通常の1遺跡での出土ベースを大きく凌駕する点は重要である。同時に、吉備・阿波・西部瀬戸内・畿内等の撇入土器や片岩系石器も出土しており、周辺諸地域の流通拠点であると同時に朱の大消費センターであった可能性がある。こうした上天神遺跡群の特殊な性格は次代に継承されることなく終止するが、朱付着土器の出土は以後も偏在する。朱をもちいる集落祭祀は、日常的な村落祭祀とはならなかった可能性がある。終末期には首長墓への独占化が強まるところからも、精製された朱は共同体の管理下に置かれていた可能性が高い。

弥生期の墓制はなお不明な点が多い。今のところ、平野部で前期に遡る墳墓遺構の検出例はなく、中期中葉の浴・長池遺跡の方形周溝墓を待たねばならない。丸亀平野など隣接諸地域の状況からは、高松平野においても、前期周溝墓群の検出は時間の問題かも知れない。また、浴・長池の周溝墓は群在せず、単独で立地する可能性が高い。県内他地域では丘陵上に立地する墳墓が多数を占める中、平地部に立地する確実な墳墓遺構は浴・長池例のみであり、こうした傾向が、平野部諸地域に普遍化できるかどうかはまだ断言できない。こうした弥生墳墓の停滞した状況は、後期後半には払拭される。林・坊城遺跡では、低地帯に接して径約13m程の円形周溝墓が3基検出されており、歴代首長の墓域と考えられる。削平のため、埋葬施設に関する情報が皆無な点は惜しまれるが、周溝内より豊富な供献土器群が出土している。こうした資料から、当該地域では弥生墳墓からの順当な発展軸上に、前期古墳が成立するものではないことが明らかとなってきた。弥生後期後半よりみられる祭祀的伝統の上に外部地域起源の諸特性が重層化していく中で、前方後円墳祭式が創出されたようだ。

一方土器様式では、後期中葉に旧香東川下流域の平野中央部で、独自色の強い土器の一群が成立した。下川津B類土器と呼ばれているこの一群の土器は、精選された素地粘土を用い、中期以来の伝統的な成形・調整手法を頑なに墨守し、基本的な器種組成も終末期まで大きな変更

のみられない、特殊性を付与されることから、専業的生産の可能性が指摘できる。吉備や山陰、畿内、東海などで相次いで成立する、地域色の強い土器群の一例であり、周辺諸地域に頻繁に搬出される器種でもある。これら土器群の成立の要因が問題となるが、やはり地域結束の象徴的器物という位置付けが妥当ではなかろうか。これら土器群の成立に伴い、平野中枢部では一般民衆より隔絶された首長墓の成立をみる。そして同種土器は、これら首長墓へ頻繁に供献されつつ、終末期を境にその分布域や搬出量が大幅に拡大される可能性が高い。こうした動向は、当該地域の古墳時代の土器様式である東西国系土器群（蔵本1999a）成立への助走的段階として位置付けられると考える。

上述したように、高松平野の集団は、弥生後期中葉以降独自色を強める中で、古墳時代へと突入していく。弥生終末期には、石清尾山の一角に積石塚の鶴尾神社4号墳が築造され、「鶴尾型墳墓祭祀」とした独自の首長墓儀礼（蔵本2000）を確立する。

## ii. 基本層序

調査対象地は、調査前においては県警機動隊舎グランドとして整地されており、機動隊舎建設前は県警本部の送電所となっていた。したがって、現地表下にはこれら施設に伴う整地土層が厚く堆積していた。現地表面の標高は、18.7m前後である。

上記したように地表下には、層厚80~90cm程度の花崗土による盛土がみられる。この盛土層下には、層厚10~20cm程度の諸施設設置前の耕作土層とみられる黄灰色粘質土の水平堆積が認められ、施設設置時にはこれら耕土層を除去せずに盛土が行われたようだ。耕作土層上面の標高は17.8m前後であり、周辺地域の水田面の標高とほぼ等しい。耕作土層の下位には、耕土層に近似した層厚15cm程度の黄灰色粘質土の水平堆積が認められ、近世から近代頃の旧耕作土層もしくは床土層と考えられる。

これら旧耕土層群の下面が第1遺構面となる。第1遺構面は、後述する弥生後期包含層である黒褐色粘質土層をベースとして、調査区南西部で標高17.66m、北東部で同17.54mと緩やかに北東方向に傾斜して検出された。上記した施設設置時もしくはそれ以前に遡る相当の擾乱を蒙っており、遺構面は凹凸が顕著であった。

弥生後期包含層である黒褐色粘質土層の下位には、無遺物層と考えられる灰白色粘質シルト層が認められ、本層上面が第2遺構面となる。第2遺構面の標高は、調査区南西部で17.54m、北東部で17.42mと第1遺構面同様北東方向に緩やかに傾斜して検出された。

なお、調査終了間に調査区東半部で重機により遺構面下層の土層堆積状況の確認トレンチを掘り下げた。このトレンチ部分では、遺構面下に緩やかに北方向に傾斜した灰白色ないし黄白色ないしオリーブ黒色粘土の水平堆積が認められ、南半部で16.98m付近を頂部とする黄褐色砂礫層の盛り上がりが確認された。なお、これら土層からは遺物は出土していない。



fig. 4 基本土層柱状図

### iii. 弥生時代の遺構・遺物

当該時期の遺構は、第2遺構面で検出した。掘立柱建物1棟と溝1条のほか、柱穴数基がある。

SB01 調査区中央西寄りで検出された、1間四方の掘立柱建物である。構造から竪穴住居の主柱穴の可能性も考えられたが、住居の掘り込みは勿論、壁溝や中央ピットなども確認できなかったことから、掘立柱建物として報告する。柱間距離は、短軸1.7m、長軸2.4m程度で、比較的整った長方形を呈する。柱穴は、径0.25~0.3mの略円形を呈し、残存深は0.25~0.4m、主軸方向はN 46.9° Wであった。柱穴の埋土は、黒褐色粘土であり、西列の柱穴2穴では径10cm程度の柱痕跡を確認した。遺物は弥生上器小片が少量出土したに限られるが、胎土の面で後述する角閃石群に近似するものがあり、SD02とほぼ同時期に位置付けられる。

SD02 調査区北西隅で検出した、幅2.5m前後、残存深0.5m程の断面逆台形状を呈する直線溝である。第1次調査によって検出されたSD下01の南延長部で、今回の調査によって延長約5.5mを検出した。流路方向は、N 50.5° Eで、底面の標高は今回の調査区付近で17.00m前後、第1次調査区部分で16.80m前後を測り、底面の傾斜から北東方向に流下していたものと考えられる。埋土は2層に細分された。砂層の堆積は認められず黒褐色粘土層を主としており、穏やかな環境下で堆積したことが想像される。第1次調査区では、この黒褐色粘土層下にベース層の流入土を中心とした数層に細分される堆積層が検出されたが、本調査区ではこれらの土層は確認されなかった。遺物は、底面よりやや浮いて東縁部寄りにまとまって出土したことから、溝東側より投棄された可能性が高い。多量の遺物が出土したが、いずれも完形に復元されるものはない。この傾向は第1次調査区にも共通することから、本溝が機能停止後埋没までの一定期間、生活残滓の廃棄場所として積極的に利用されていたことを反映している。

遺物は、紙数の都合上、器種・器形のヴァリエーションが網羅されるように、また出土量の少ない壺等については細片を含め可能な限り図化した。したがって、掲載した遺物の比率は、およそその傾向を示してはいるが、実際の器種組成を反映したものではない。

1・2は、長頸形態の広口壺。口縁端部は、上方へ断面三角形状に摘み上げられ、1の端面は凹線状に窪む。2の口縁部は、接合しなかつたが近接して出土した同一個体と思われる破片より図上で復元した。3・4・7は、頸部が内傾する広口壺。口縁端部の形状は1・2と同じで、7の端面には沈線状の窪みが巡る。5・6は細頸壺の体部とみられる。5は、体部中央に断面矩形の突帯を2条付し、突帯間に竹管文を施す吉備系の壺である。ただ、吉備地域では同種壺体部へ竹管文の施文例は乏しく、搬入品であるかどうかは今後の検討に譲る。胎土や色調の面では、在地系の中では少数派であり、搬入品である可能性は高い。6は、在地系の形態。

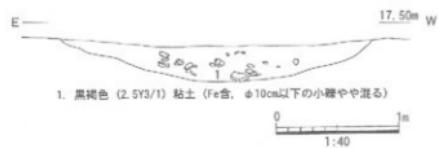


fig. 5 SD02 断面図



PL. 1 SD02 遺物出土状況 (北→)

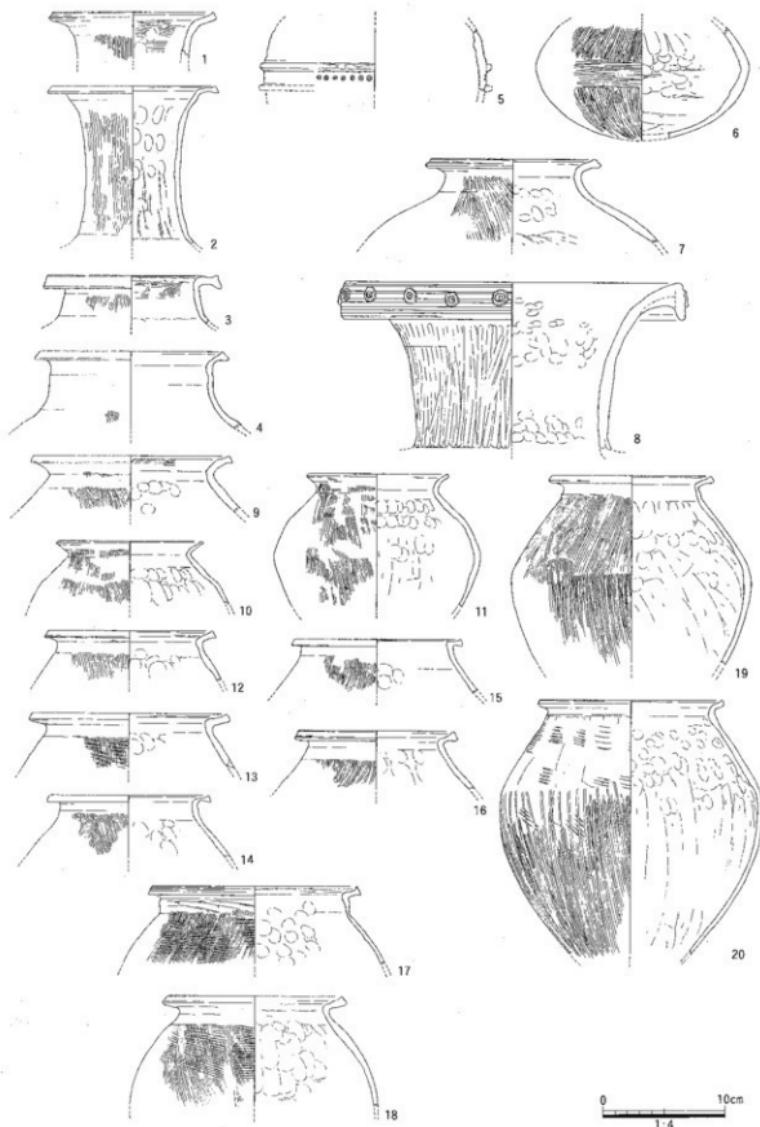


fig. 6 SD02出土遺物実測図 1

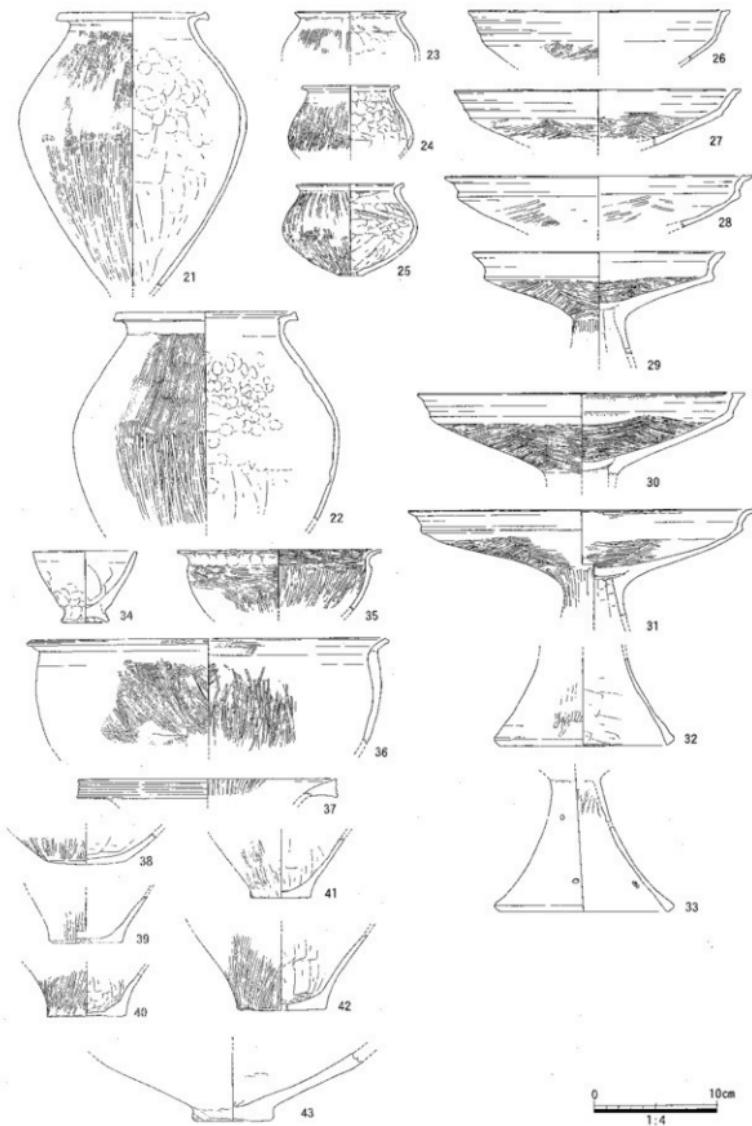


fig. 7 SD02出土遺物実測図 2

破断面に被熱痕があり、煮沸中に破損したものを廻棄したか破損後転用した可能性がある。8は胎土中に粗粒の角閃石を多量に含み、形態、胎土の面でも生駒西麓産の広口壺である。接合が不十分なため図示していないが、体部はやや張りのある球形に近い形状を呈し、底部は円盤状に突出した平底となる。本形態の広口壺は、後期初頭の龜井遺跡（その2）SD2302以降、後期を通して製作される。本例のように、円形浮文の貼付位置にバラツキが生じ、凹線文も浅く等間隔でなくなり、頸基部の突帯の消失や頸部の幅広のミガキ調整、体・底部の形態などは、西の辻I式にやや後出する特徴といえる<sup>(4)</sup>。9～11は、在地系のく字外反口縁形態の壺。口縁端部の形状は、四角く納める11と、上下に小さく挽き出しつつ四角く納める9、上方へ小さく摘み上げる10とヴァリエーションがみられる。その他基本的な体部形状や調整手法は共通する。12～22は、定型化した在地系の甕（14・16・19～21）及びその模倣形態（12・13・15・17・18・22）である。口縁部は強く折り返し、端部を上方に摘み上げる。口縁部形態にはかなりのヴァリエーションを認めるが、これは終末期を通して継続する。おそらくは土器製作者の細かなクセを反映したものであろう。体部外面にタタキメを残すのは、本期までの特徴である。当該期以降、タタキメはハケによって基本的に消される。23～25は、小形甕もしくは鉢である。精選された細かな素地粘土を使い、細かなハケやミガキを多用した精製品である。24も破断面を含め一部に被熱痕を認める。26～33は高坏。26・27は、坏部上半外面にヨコナデにより生じた鈍い凹線状の段を認める形態。少なくとも後期初頭より系譜が迫れ、確實に本期までは残存する。28～33は、在地系の定型化した高坏（29・30・32）もしくはその模倣形態（28・31・33）である。口縁端部は外方へ強く摘み出されるものが支配的だが、30のように内側にも突出し、上面に平坦面を作る占相を留めるものもある。34は小形鉢。おそらく本期を境に出現するとみられる。浅皿形態や外反口縁形態は出土しておらず、少なくとも前者についてはより後出する可能性が高い。35は中形鉢、36は大形鉢である。いずれも外反口縁形態の鉢で、小形鉢同様浅皿形態はまだ出現していない可能性がある。37は、小形器台の口縁部であろう。端部は厚く肥厚させ、端面に3条の凹線文を施す。大型器台はより以前に土器様式より姿を消しており、小形器台も本期を最後に器種組成から欠落する。38～43は底部である。38・43は壺形態の底部と考えられ、38は底面がレンズ状を呈する凸面底形態、43は円盤状に突出する。39～42は、壺底部とみられ、いずれも突出気味の安定した平底を呈する。39の底面中央には、焼成前の穿孔がみられる。なお、上記した土器の胎土については、1・5・9・23・26・35～37・41が後述するその他の一群に、3・4・7・10～13・17・18・22・24・27・28・31・33・34・38・42・43が黒雲母群に、6・14～16・19～21・25・29・30・32・39・40が角閃石群にそれぞれ分類された。出土遺物は以上のほか、極微量ながら弥生前期と考えられるややローリングを受けた土器片や、サヌカイト製のスクレイバー・楔形石器削片・剥片、砂岩製砥石・凹み石などの石器類が少量出土している。

上記出土遺物は、甕を中心として細部形態にかなりのヴァリエーションが認められる。しかし、基本的な形態や調整手法は共通し、出土状況からも一括性の高い遺物群と捉えることができる。現状では、器種組成や高坏口縁端部の形状、あまり開かない脚裾部などの点から、高松市林・坊城遺跡 SX03（宮崎1993）より先行し、普通寺市旧練兵場遺跡研修棟調査区 SK12（森下1996）に併行すると考えられ、後期中葉（上東・鬼川市Ⅱ新併行）の時期を与えておきたい。この年代観は、搬入土器である5や8の位置付けとも矛盾しないと考える。

#### iv. 古代の遺構・遺物

当該期の遺構は、第1遺構面で検出した。出土遺物は乏しいが、形状や埋土より確実に当該期に位置付けられるものとして、調査区北西隅で検出した柱穴列SA04がある。

**SA04** 調査区北西隅で検出した。南北方向は調査区外へ延長するとみられ、北延長方向の第1次調査区に、本柵列の一部になるとみられる柱穴が存在し、また西側にはそれに組み合う柱穴もみられることから、最終的には掘立柱建物となる可能性が高いが、結論は正式報告時に持ち越したい。柱穴は、平面形は1辺0.20m前後の隅丸方形を呈し、断面形は逆台形ないし矩形を呈する。残存深は0.19m前後と浅い。いずれも径0.08m程度の柱痕跡が認められ、底面には自然石の根石が置かれていた。柱痕部での軸方向は、N 2.1° Eである。また柱穴埋土は、灰色系の粘質土であった。9世紀後半から10世紀前半代に位置付けられる土師器皿、須恵器片が少量出土し、また第1次調査時に検出された10世紀前半代を中心とする平安期建物群（II区SB01・02）に近接することから、若干軸方向は異なるものの当該期建物群の一部を構成するものと判断した。

#### v. 古代以降の遺構・遺物

当該期の遺構は、第1遺構面で検出している。土坑3基（SK01～03）、柵列3条（SA01～03）、耕作痕跡とみられる不明遺構（SZ01～04・SD01）がある。

**SK01** 調査区中央で検出した土坑である。後述する耕作痕SZ02・03より後出する。平面形は、長軸約1.8m、短軸約1.6mの南北にやや長い隅丸方形を呈し、残存深は0.4mで、断面形は整った逆台形状を呈する。埋土は2層に分層され、いずれもベース層のブロック土を含んだ、灰色系粘質土ないし砂質土が堆積する。おそらく開削後間もなく、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、須恵器、土師器、サヌカイト剥片のほか、肥前系の近世陶磁器片が出土しており、18世紀代に位置付けられよう。

**SA01** 調査区北東部で検出した柵列である。北方向へは調査区外へ延長する可能性を残す。4間分、延長約4.3mを検出した。柱間距離は心々間で、0.66～1.40mと一定しない。主軸方向はN 5.5° Eである。柱穴は、径0.2m前後の略円形を呈し、残存深は数cmと極めて浅い。埋土は、暗灰褐色砂質土である。遺物は、弥生土器とみられる素焼土器細片1点が出土したのみで、年代的位置付けの決め手に欠く。埋土からすれば、中世頃の可能性もなくはないが、具体的な根拠に乏しい。

**SA02** 調査区北東部で検出した。上記SA01と重複し、柱穴の切り合い関係よりSA01より後出する。本柵列も北調査区外へ延長する可能性を残す。4間分、延長約5.0mを検出した。柱間距離は心々間で、0.76～1.40mと一定しない。主軸方向はN 6.9° Eである。柱穴は、径0.2m前後の略円形を呈し、残存深は数cmと極めて浅い。埋土は、暗灰褐色砂質土である。SA01と近似した内容を有することから、SA01撤去後間もなく設置されたと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不詳。

**SA03** 調査区中央西寄りで検出した柵列である。4間分、延長約8.4mを検出した。柱間距離は心々間で2.0～2.1m、主軸方向はN 5.3° Eである。柱穴は、径0.20m程度の略円形を呈し、残存深は0.26～0.44mを測る。埋土は、いずれも2層に細分され、柱材は抜き取られた可能性が高い。また、根石をもつものは認められない。出土遺物は土師器や須恵器の細片が少量出土したのみで、細かな年代を特定することは困難。より新しい遺物の出土がみられない点か

ら、古代まで遡る可能性もあるが、第1次調査で検出された古代の柵列遺構とは、柱穴の形状が異なることから、後出するものとして位置付けておきたい。

SZ01～04 調査区東半部で検出された、耕作痕跡とみられる浅い掘り込みを伴った遺構である。南・北・東方向へは、調査区外へ延長する。また切り合い関係より、SK01より先行する。検出された掘り込みは、概ね矩形に区画され、軸方向はN12.4°Eと条里型地割の方向と合致する。これら矩形に区画された掘り込みを、北から順にSZ01～04と呼称している。掘り込み底面の第2遺構面包含層上には、鋤痕もしくは踏み込みとみられる無数の不定形な窪みが検出され、このことから耕作痕と判断した。耕土となる覆土は、灰白色ないし灰オリーブ色粘質シルトで、上位の近世から近代と推定される耕作土層に近似する。遺物は、土師器や須恵器の細片の他、鉄釘や鍛冶関連遺物とみられる焼土塊、中世土師質土器皿の小片とみられるものもあり、中世以降に下ることは間違いないだろう。埋土を重視すれば、SK01の18世紀近くまで下らせる可能性もある。

なお、本遺構で栽培された作物を特定することを目的として、耕土の花粉分析を行った。分析の結果は、イノモトソウ属のシダ類胞子が1個体と他のシダ類胞子が少量検出されたのみで、検出される花粉化石の数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかつた。おそらく堆積時に取り込まれていた花粉が、その後の経年変化により分解・消失したことに起因すると考えられる<sup>(5)</sup>。今後、植物珪酸体分析や微細遺物同定などを行い、本分析の成果を補うことが望まれる。

#### vi.まとめ

##### 弥生前期環濠集落について

今年度の調査では、弥生前期の環濠の延長は確認されていない。平成10年度の調査によって確認された環濠とされる溝は2条で、2重環濠が想定されている。

内環濠は、検出面幅約1m、残存深約0.5m、底面幅0.2m程で、断面形状はやや開いたV字状を呈する。また外環濠は、検出面幅約2.4m、残存深0.3m、底面幅0.6m程で、断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。外環濠が幅広くより深く掘り込まれている点は、外

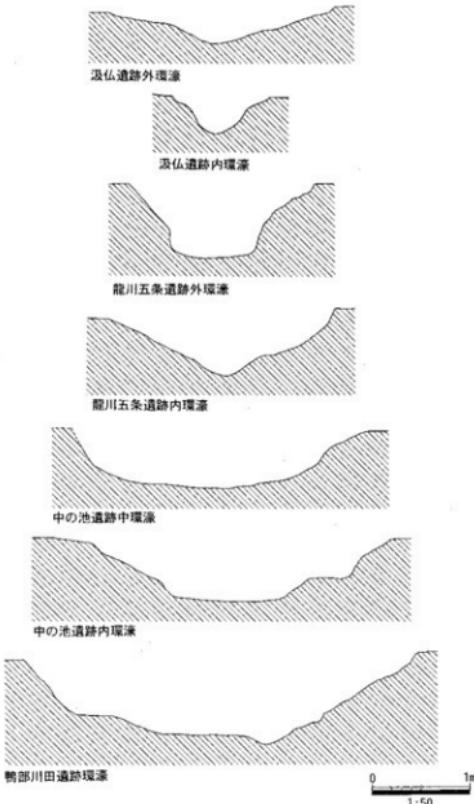


fig. 8 主要環濠の断面

環濠がより重視されたことを意味している。環濠間の距離は、検出面で6~7m程度である。また、環濠内で検出されたSX下02・05を住居遺構とみれば、その残存深より1m程度の遺構面上の削平が想定できる。おそらく環濠は、1.5m程の深さを有していたと推測される。環濠の埋土は、いずれも褐色系のシルトが成層的に堆積している。人為的な埋め戻しや洪水堆積など、急激な環境の変更に起因するものではなく、穏やかな環境下で自然埋没にまかされていたことが想像される。なお、外環濠には、埋没が一定程度進行した後に、局部的ながら改修痕が伺える。

さて、Fig. 8には県内の主要な環濠集落の環濠の断面形状を集めた<sup>(6)</sup>。汲引内環濠のように、緩やかなV字形を呈するものが龍川五条遺跡内環濠にある以外は、いずれも箱型ないしは逆台形状を呈する点で共通する。埋土も、溝底にはシルト～粘土層が堆積し、旺盛な流水下での堆積層が認められないのが特徴である。また溝壁面の崩落土も、溝底には達していない点で共通する。

一例を示そう。龍川五条遺跡外環濠では、溝底に灰白色砂質土（森下1998報告書第21図②6層）が堆積した後、溝両側からベース層のブロック土を混入する黄灰色砂質土（同図5層）が斜面堆積しており、この層を掘り込んでさらに環濠が改修（同図1～3層）されている状況が確認できる。黄灰色砂質土は、溝の両側に堆積していることから、人為的な埋め戻しに伴うものではなく、溝壁面の崩落に起因するものであろう。

こうした断面形状や埋土の堆積状況から、これら環濠はまさに水濠として機能していたと考えたい<sup>(7)</sup>。急勾配の典型的な断面V字環濠に導水することは、掘り方法面の崩落の危険性を増すことになり、合理的ではない。龍川五条や汲引などで、環濠の一部が自然河川に合流することも、上記した点と矛盾するものではない。なお、緩やかなV字形を呈する汲引内環濠では、環濠の一部が途切れ陸橋状を呈していることが確認されており、内環濠には導水されていなかった可能性が考えられる。

#### 弥生後期溝SD02出土の土器

SD02出土土器について、倍率40～80倍程度の実体顕微鏡を用い、胎土の砂粒構成の観察を行った。試料は、SD02より出土した2cm角以上の上器片全点（1,304点）を対象とし、石英、長石、角閃石（輝石）、黒雲母、火山ガラスの有無や胎土中のおおよその比率を求め、以下の胎土分類を行った。より実体に即した検討を試みるには、平成10年度の調査資料をも加えて検討することが望まれるが、今年度の資料のみでもコンテナ8箱とまとまった量が出土しており、全体的な傾向は捉えることができるものと考える。また、剥片プレパラートを作成し高倍率の偏光顕微鏡を用いた観察やX線回折分析は行っていないため、重鉱物例えは角閃石と輝石の細分などは行えていない。不備や詳細は正式報告書に譲ることとして、以下分析結果について述べる。

分析の結果、SD02出土の土器片は、角閃石（輝石）を多量に含む一群（角閃石群）、黒雲母を多量に含む一群（黒雲母群）、生駒西麓産、その他の4種に概ね分類された。

角閃石群は、角閃石の量が、石英、長石を上回る点で、特徴的な鉱物組成を有する土器である。角閃石は、大部分が約0.3mm以下の微細粒で、少数0.7~0.8mm程度の比較的大きなものも含まれる。土器胎土の色調は、にぶい黄褐色（10YR4/3）から褐色（7.5YR4/6）を発色する。いわゆる下川津B類土器や胎土1類土器と呼ばれている土器を含む。この胎土を有する

土器は、一般に中形甕の体部の器壁厚3mm前後と薄く、器表面の各種調整手法や端部の仕上げもシャープで入念になされており、素地粘土は水簸されている可能性があり、粒径2mm以下の細粒が多い。また、角閃石や雲母の量比によって、細分される可能性がある。

黒雲母群は、肉眼でも容易に観察されるほど、黒雲母が多量に含まれる。2mm程度の粒径の大きな黒雲母が多数含まれる点が、他の土器にはない特徴である。中形甕の体部の器壁厚5mm前後と比較的の厚みがあり、調整や端部の仕上げは鈍重であるが、相対的にぼったりした感がある。6mm前後の粗砂粒が含まれるなど、胎土もやや粗い。量的には乏しいが、火山ガラスを含有するものもあり、雲母粒の粒径などにより細分される可能性がある。

生駒西麓産の土器は、鉱物種の面では角閃石群に類似するが、含有される角閃石の粒径が2mm前後と上掲した角閃石群のそれと比して粗粒であり、黒雲母粒も相対的に多く含まれるなど、明らかに素地粘土が相違することや、搬入品であることを考慮して一群を設けた。広口壺1点(8)のみが出上している。

その他に分類された土器は、石英・長石を中心とし、微量の角閃石や黒雲母が含まれる一群で、火山ガラスを多量に含むもの<sup>(3)</sup>もある。特定の鉱物種が多量に含まれない点で一括したが、複数の素地粘土採取地を含む一群と想像され、細分が今後の課題である。

以上の様に、SD02出土の土器は、多様な胎土（粘土採取地）を有する土器群が含まれていることが明らかになった。そこで、上掲各種胎土の出現頻度を求めたのがfig.9である。図には、総破片数に占める各種胎土の破片数を百分率で示した。最も多量にみられるのは、黒雲母群で土器片中のほぼ半数を占め、次いでその他の一群と角閃石群がほぼ同数で並んだ。

この分析結果は、本遺跡を含む旧香東川下流域を「B類土器製作圏」と称して、角閃石群に属する定型化した土器群が70~80%以上の頻度で出現し、同種土器を製作し日常的に使用していた場として捉えてきた筆者（歳本1999）には、衝撃的な結果であった。角閃石群22.2%という値は、製作圏周縁の高松平野縁辺部での同種土器の出現頻度に近い。

角閃石群と黒雲母群は、鉱物種の組成はほぼ同じであり、基本的にはその量比が大きく異なる。時に黒雲母類に含まれる火山ガラスや堆積岩片は、可塑剤などとして二次的に混合された粘土中に含まれていたものであろう。両者は共に、深成岩等<sup>(4)</sup>を母岩とする一次風化粘土を使用して製作されたと考えられる。上記したように、両者の土器は器形や調整手法など基本的属性が大きく異なっており、工人（集団）を異にする可能性が高い。この粘土採取地から集団の領域を特定することが、今後の大きな課題である。また、同種土器製作圏内部の在り方についても、資料の増加を待って再度検討し直す必要があろう。

## 註

- (1) 地域区分の名称は、建設省国土地理院『土地条件図 高松南部』『同 丸龜』1986を参考とした。
- (2) 渋仮遺跡の西側を北東流する旧河道B（高橋1992）は、下流側の居石遺跡の調査で、埋没時期が古墳時代に下ることが確認された。渋仮遺跡の環濠開削時には流路として機能していた可能性があり、環濠がこ

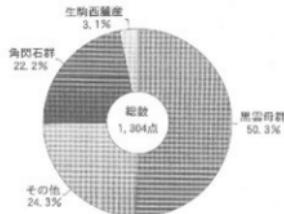


fig. 9 SD02出土土器胎土の出現頻度

の流路に取り付いていたとするならば、その内径はおよそ70m前後となる。

- (3) SR02は、報告書では「自然河川」とされているが、位置や断面形状から人工的な水路であることは間違いない。また、同報告書に掲載されたほぼすべての遺物は、出土層位との関係が全く記載されておらず、遺構の開削から埋没までの時間的推移を辿ることができない。
- (4) 本資料については、森岡秀人、山田隆一の両氏より有意なご教示を頂いた。
- (5) 花粉分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。分析内容の詳細については、正式報告書に掲載予定である。
- (6) 中ノ池遺跡の環濠については、昭和56年度の調査によって確認された3条の溝について、SD8105を内環濠、SD8101を中環濠とした。
- (7) 県内の環濠集落の環濠内の埋土について、例えば珪藻分析など自然科学的分析がなされた例が皆無なため、果たして環濠が滯水状態にあったかどうか、残念ながら確定はできない。今後は、こうした自然科学的分析も行われることを期待したい。なお、環濠の性格については、寺沢薰の指摘（寺沢2000）に大きく依っている
- (8) 火山ガラスを多量に含む土器は、極微量ながら認められた。器種不明な土器細片が多く、本溝出土の同種土器は、胎土の特徴から弥生前期に属する可能性が高い。
- (9) 角閃石群については、従来からの指摘のとおり石清尾山南側の浄願寺山西南麓等に分布する閃綠岩を、黒雲母群については、石清尾山から浄願寺山の裾部等に広く分布する黒雲母角閃石花崗岩を母岩とする風化粘土がそれぞれ使用されたと考えているが、今後理化学的な分析により同定を試みたい。

#### 主要参考・引用文献

- 熊木洋太・坂井尚登・小野塙良三 1986 「讃岐平野南縦、長尾断層の活動に関する年代試料」『活断層研究2』
- 藏本晋司 1999 a 「讃岐における古墳出現の背景－東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察－」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡II』香川県教育委員会ほか
- 藏本晋司 1999 b 「弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について－一下川津B類土器の動向を中心として－」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡II』香川県教育委員会ほか
- 藏本晋司 2000 「四国北東部における前方後円墳創出期の諸様相」『古代学協会四国支部第14回大会前方後円墳を考える－研究発表要旨集－』
- 清水芳裕 1999 「中間西井坪遺跡出土土器の胎土の特徴と材料の検討」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡II』香川県教育委員会ほか
- 高橋学 1992 「高松平野の地形環境－弘福寺領山田郡田園比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査－弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書－』高松市教育委員会
- 高橋学 1996 「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第7集』
- 寺沢薰 2000 『日本の歴史02 王権誕生』講談社
- 榎宜田佳男 1996 「環濠集落と戦争」『池上曾根遺跡史跡指定20周年記念 弥生の環濠都市と巨大神殿』
- 宮崎哲治 1993 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡」香川県教育委員会ほか
- 森下英治 1996 a 『香川県の石器組成の変遷』『国立歴史民俗博物館資料調査報告書7 農耕開始期の石器組成1』
- 森下英治 1996 b 『旧練兵場遺跡III－平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告－』香川県教育委員会
- 森下英治 1998 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊 龍川五条遺跡II・飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか
- 山元素子・岡本利 1999 『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 池仮遺跡』香川県教育委員会ほか
- 吉田広 1999 「武器形青銅器流入の一形態－高松田中遺跡出土青銅器から－」『古代吉備 第21集』

| 器番号 | 種類   | 法尺     | 質量(g)   | 直径(cm)   | 土   |   | 色                 |                   | 調                |                  | 残存率 | 備考    |
|-----|------|--------|---|--|---|---|-------------------|-------------------|------------------|------------------|-----|-------|
|     |      |        |   |  | 口径  | 底径  | 外<br>面            | 内<br>面            | 面                | 面                |     |       |
| 1   | 盾口壺  | 13.2   | 密 : 0.1~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>やややや : 0.1~4.0mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>やややや : 0.1~4.0mmの石英・長石・角閃石・黒雲母 | 密 : 0~3mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>密 : 0~3mmの石英・長石・角閃石・黒雲母 | にぶい黄褐色 (10YR7/3)  | にぶい黄褐色 (10YR7/3)  | 明褐色 (7.5YR5/8)    | 明褐色 (7.5YR5/8)    | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 1/8 | 吉備系   |
| 2   | 盾口壺  | 13.4   |   |  |   |   | 明褐色 (7.5YR5/8)    | 明褐色 (7.5YR5/8)    | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 1/8 |       |
| 3   | 盾口壺  | 13.9   |   |  |   |   | 暗褐色 (7.5YR6/6)    | 暗褐色 (7.5YR6/6)    | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 2/8 |       |
| 4   | 盾口壺  | 14.8   |   |  |   |   | 灰白色 (10YR8/1)     | 灰白色 (10YR8/1)     | 灰白色 (10YR8/1)    | 灰白色 (10YR8/1)    | 1/8 |       |
| 5   | 細頸壺  | 14.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 1/8 |       |
| 6   | 細頸壺  | 13.4   |   |  |   |   | 明褐色 (7.5YR5/6)    | 明褐色 (7.5YR5/6)    | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 1/8 |       |
| 7   | 灰口壺  | 27.4   |   |  |   |   | 明褐色 (7.5YR6/6)    | 明褐色 (7.5YR6/6)    | にぶい黄褐色 (10YR6/6) | にぶい黄褐色 (10YR6/6) | 6/8 | 生駒式輪掌 |
| 8   | 灰口壺  | 13.0   |   |  |   |   | 明褐色 (7.5YR6/6)    | 明褐色 (7.5YR6/6)    | にぶい黄褐色 (10YR6/6) | にぶい黄褐色 (10YR6/6) | 1/8 |       |
| 9   | 中形壺  | 16.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (2.5YR5/3) | にぶい黄褐色 (2.5YR5/3) | 明褐色 (5YR7/3)     | 明褐色 (5YR7/3)     | 1/8 |       |
| 10  | 中形壺  | (11.6) |   |  |   |   | 明褐色 (2.5YR6/4)    | 明褐色 (2.5YR6/4)    | にぶい黄褐色 (10YR7/6) | にぶい黄褐色 (10YR7/6) | 2/8 |       |
| 11  | 中形壺  | 11.4   |   |  |   |   | 明褐色 (2.5YR6/6)    | 明褐色 (2.5YR6/6)    | 明褐色 (10YR7/6)    | 明褐色 (10YR7/6)    | 2/8 |       |
| 12  | 中形壺  | 13.4   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 1/8 |       |
| 13  | 中形壺  | 15.9   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 1/8 |       |
| 14  | 中形壺  | 13.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | 明褐色 (7.5YR5/3)   | 明褐色 (7.5YR5/3)   | 1/8 |       |
| 15  | 中形壺  | 13.7   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 1/8 |       |
| 16  | 中形壺  | 12.7   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | にぶい黄褐色 (10YR6/3)  | 明褐色 (7.5YR5/3)   | 明褐色 (7.5YR5/3)   | 1/8 |       |
| 17  | 中形壺  | 16.8   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 1/8 |       |
| 18  | 中形壺  | 14.3   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 1/8 |       |
| 19  | 中形壺  | (13.0) |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 2/8 |       |
| 20  | 中形壺  | 15.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 1/8 |       |
| 21  | 中形壺  | (12.0) |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 1/8 |       |
| 22  | 中形壺  | 14.6   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 2/8 |       |
| 23  | 鉢    | 9.0    |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 2/8 |       |
| 24  | 鉢    | 7.9    |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 2/8 |       |
| 25  | 鉢    | (8.8)  | (7.5)   | (1.8)  | 密 : 0.1~3.0mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>やややや : 0.1~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>やややや : 0.1~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母 | 密 : 0~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>密 : 0~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>密 : 0~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母 | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | にぶい黄褐色 (10YR6/4)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 2/8 |       |
| 26  | 瓶    | 21.1   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 1/8 |       |
| 27  | 高瓶   | 23.1   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR5/8)   | 明褐色 (7.5YR5/8)   | 3/8 |       |
| 28  | 高瓶   | 25.2   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR4/6)   | 明褐色 (7.5YR4/6)   | 1/8 |       |
| 29  | 高瓶   | 20.4   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 明褐色 (7.5YR5/6)   | 4/8 |       |
| 30  | 高瓶   | 26.6   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 5/8 |       |
| 31  | 高瓶   | 28.2   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/8)   | 明褐色 (7.5YR6/8)   | 2/8 |       |
| 32  | 壺    |        |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR7/6) | にぶい黄褐色 (7.5YR7/6) | 暗褐色 (7.5YR7/6)   | 暗褐色 (7.5YR7/6)   | 1/8 |       |
| 33  | 壺    |        |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR7/6) | にぶい黄褐色 (7.5YR7/6) | 暗褐色 (7.5YR7/6)   | 暗褐色 (7.5YR7/6)   | 1/8 |       |
| 34  | 小形鉢  | (8.2)  | 5.9   | (3.6)  | 密 : 0.1~3.0mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>やややや : 0.1~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母                                   | 密 : 0~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母<br>密 : 0~1.5mmの石英・長石・角閃石・黒雲母                              | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 8/8 |       |
| 35  | 中形鉢  | (16.8) |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 7/8 |       |
| 36  | 大形鉢  | 28.9   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR7/3) | にぶい黄褐色 (7.5YR7/3) | 暗褐色 (7.5YR7/3)   | 暗褐色 (7.5YR7/3)   | 6/8 |       |
| 37  | 大型器皿 | 21.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR7/4) | にぶい黄褐色 (7.5YR7/4) | 暗褐色 (7.5YR7/4)   | 暗褐色 (7.5YR7/4)   | 1/8 |       |
| 38  | 壺    |        |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR7/3) | にぶい黄褐色 (7.5YR7/3) | 暗褐色 (7.5YR7/3)   | 暗褐色 (7.5YR7/3)   | 4/8 |       |
| 39  | 壺    | 20.0   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 明褐色 (7.5YR6/6)   | 8/8 |       |
| 40  | 壺    | 21.1   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | にぶい黄褐色 (10YR6/6)  | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 暗褐色 (7.5YR6/6)   | 7/8 |       |
| 41  | 壺    | 22.2   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 2/8 |       |
| 42  | 壺    | 22.2   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 2/8 |       |
| 43  | 壺    | 23.3   |   |  |   |   | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | にぶい黄褐色 (7.5YR6/6) | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 明褐色 (7.5YR5/4)   | 2/8 |       |

Tab. 1 SD02出土土器觀察表

## 報告書抄録

| ふりがな             | かがわんけいさつほんぶきどうたいしゃけんせつにともなうまいぞうぶんかさいちょうさがいほう こんほとけいせきに |              |                         |                           |                                       |                              |      |
|------------------|--|--------------|-------------------------|---------------------------|---------------------------------------|------------------------------|------|
| 書名               | 香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財調査概報 波仏遺跡II                       |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 副書名              |  |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 卷次               | 平成12年度   |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| シリーズ名            |  |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| シリーズ番号           |  |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 編著者名             | 藏本晋司   |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 編集機関             | 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター                                    |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 所在地              | 〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191            |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 発行機関             | 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター                            |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 発行年月日            | 平成13年3月31日   |              |                         |                           |                                       |                              |      |
| 総頁数              | 目次等  | 本文           | 観察表                     | 図版                        | 写真枚数                                  | 挿図枚数                         | 付図枚数 |
| 20頁              | 2頁   | 17頁          | 1頁                      | 0頁                        | 1枚                                    | 9枚                           | 0枚   |
| ふりがな<br>所収遺跡名    | ふりがな<br>所在地  | コード<br>市町 遺跡 | 北緯 東経                   | 調査期間                      | 調査面積                                  | 調査原因                         |      |
| こんほとけいせき<br>波仏遺跡 | かがわんたかまつしたひしもまち<br>香川県高松市多肥下町1262-1                    | 37201        | 34° 17' 58" 134° 3' 23" | 20000701<br>~<br>20000930 | 360m <sup>2</sup>                     | 香川県警<br>察本部機<br>動隊舎建<br>設に伴う |      |
| 所収遺跡名            | 種別   | 主な時代         | 主な遺構                    | 主な遺物                      | 特記事項                                  |                              |      |
| 波仏遺跡             | 集落跡  | 弥生時代後期       | 掘立柱建物・溝                 | 弥生土器・石器                   | 弥生後期の溝より<br>生駒西麓産や吉備<br>系の搬入土器が出<br>土 |                              |      |
|                  |  | 平安時代?        | 柵列                      | 土師器                       |                                       |                              |      |
|                  |  | 古代以降         | 柵列・土坑・耕<br>作痕跡          | 土器・須恵器<br>近世陶磁器           |                                       |                              |      |

## 補記

SD02 出土土器について、本文中に書き漏らしたことを以下に記す。

出土土器のうち甕については、14 点を図示した。図示した資料にもみられるように、いわゆるV様式系の叩き甕は、本資料の中には含まれていない。この点は、図示しなかった資料、体部片を含めて出土した全土器片を確認した結果でもあり、ほぼ誤りないものと考える。讃岐中央部における叩き甕の出現は、高松市多肥松林遺跡 SD07、坂出市下川津遺跡 SD II 11、同川津一ノ又遺跡IV区 SH23 等を嚆矢として、後期後半でもより後出する段階に下る可能性を指摘しておきたい。また、終末期には普遍化するが、それでも甕総数の1～2割程度と必ずしも主体を占めるものではなかったものとみられる。

藤好史郎ほか 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ 下川津遺跡』香川県教育委員会

古野徳久 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡II』香川県教育委員会  
山下平重 1999『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 多肥松林遺跡』香川県教育委員会

香川県警察本部機動隊舎建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成12年度

## 汲 仏 遺 跡 II

2001年3月

編集 〒762-0024香川県坂出市府中町南谷5001-4

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香 川 県 埋 蔵 文 化 財 研 究 会

印刷 鮎へいわ